

展示「第二次『早稲田文学』を飾った挿画たち —本間久雄旧蔵資料から—」を振り返る

山本 由枝（資料管理課）

この春開催された早稲田大学図書館企画展「第二次『早稲田文学』を飾った挿画たち」。展示委員の末席から、本展示の簡単な内容紹介をさせていただくとともに、一鑑賞者として感じたことを振り返ってみたい。



展示風景

1. 展示の概要

当館所蔵「本間久雄文庫（文庫 14）」は、本学名誉教授故本間久雄先生（1886-1981、以下敬称略）によって収集された近代文学研究資料（作家の書簡、自筆原稿など 762 点、図書 1514 冊）の宝庫であり、その精髓は、『明治大正文学資料 真蹟図録』（講談社 1977 年刊）でも知られている。

このコレクションに、2018 年秋、ご令孫である平田燿子氏、星川熙氏のご厚意により、新たな資料が加わった。生前、本間が愛した書画のうち、本間自身が編集に携わった、第二次『早稲田文学』の挿絵・表紙画を中心とした資料である。本間にとって、これら同時代の文物は研究資料ではなかったのであろうが、今日、『早稲田文学』の一時代を伺うことのできる本学所縁の貴重な資料といえる。両氏のご芳志への感謝とお披露目の意味をこめ、整理に先立つ形ではあったが、春の卒業・入学の季節に合わせて本展示を開催した。

小さな挿絵資料が中心だったため、鑑賞を妨げないようキャプションは書誌的事項のみにし、画家紹介等は「解説

目録」に集約した。原画の下には掲載号を配置。中央の大型平置きケースには、第一次創刊号から第十次まで『早稲田文学』の変遷が一望できるよう、創刊・復刊各号と解説パネルを配した。

2. 第二次『早稲田文学』と画家たち

『早稲田文学』は、明治 24 年（1891）坪内逍遙主宰により、早稲田大学の前身である東京専門学校から発刊された。その後休刊と復刊を繰り返しながらも、同一誌名としては日本で最も歴史の長い文芸雑誌として現在も刊行が続いている。本間は、明治 39 年（1906）に島村抱月を中心に復刊された第二次に参加し、大正 7 年（1918）から昭和 2 年（1927）まで、責任編集者としての重責をも背負うことになった。

その第二次『早稲田文学』に、今回展示した森田恒友、岸田劉生、小川芋銭、吉川霊華をはじめ、斎藤與里、竹久夢二、織田一磨、津田青楓、萬鉄五郎など錚々たる画家たちが、挿絵や表紙画を提供していたことはあまり知られていないだろう。復刊から数年間は題字と印章、論題など文字中心だった表紙や誌面が、次第に画家たちの絵で彩られていき、雑誌の視覚的なイメージも変化していく。

実際に原画を見ると、挿絵という小さな世界の中にも各画家の芸術性が凝縮されており、その力強さに驚く。そして原画の魅力を一層際立たせているのが、芸術分野にも精通していた本間の見立てによる美しい表装である。今回の展示資料は、画家と本間のコラボレーション資料とも言えるだろう。



岸田劉生「美者不問季節」

3. 画家・森田恒友の魅力

今回の展示で私が最も心惹かれた画家は、森田恒友(1881-1933)である。岸田劉生や小川芋銭と比較すると知名度はそれほど高くないかもしれない。が、何より本間は、森田の画風を深く愛していた。「土の画家」「田園画家」と呼び、『早稲田文学』の中でも、小川芋銭とともに、森田の挿絵の連作を特集的な扱いで掲載している。

森田の描く情景は、懐かしく心地よい。彼の作品を初めて見たとき、大好きなフランスの漫画家、ジャン＝ジャック サンペ¹⁾を思い出した。ツンと高い鼻、軽やかな筆致、ほのぼのとした空気感。森田の描く田園風景には、その中で生きる人や動物への温かい愛情が注がれている。森田恒友という画家に出会えたことは、私にとって大きな収穫となった。



森田恒友「犬」



森田恒友「たき火」

4. 3つの特色と今後の課題

今回の展示を振り返ったとき、3つの特色が浮かび上がってきた。まずは「見ればわかる展示」である。たとえ資料に対する深い知識がなくても、見て感じてもらうだけで伝わる。絵画資料ならではの力を再認識することができた。

第2は「発見のある展示」。今回の展示で『早稲田文学』と美術史に名を連ねる画家たちとの関係に驚きを感じたという感想も寄せられている。そして身近な大学図書館でその原画が見られること。実際に見た原画の美しさ。そんな驚きや喜びを発見してもらえる展示になったのではないだろうか。

そして第3の特色として「早稲田だからこそできる展示」であったこと。『早稲田文学』という深い所縁のある雑誌の展示は、やはり早稲田大学で開催するからこそ、より高い興味を喚起することができ、意義があるだろう。

一方で、この3つの魅力ともいえる特色を牽引力として十分に伝えきれなかったという思いもある。現在展示室は、正確な来場者数を把握する術がなく、宣伝告知方法による効果を比較することは難しい。今後の課題として考えていきたいと思う。

2018年春の新収資料展のサブタイトルは、「縁ありて早稲田に集いしものたち」であった。この言葉のように、これからもこの早稲田大学に集う「ものたち＝人と資料」を繋ぐ場としての展示を模索していきたい。

【参考文献】

- ・『第二次『早稲田文学』を飾った挿画たち—本間久雄旧蔵資料から—解説目録』 早稲田大学図書館, 2019
- ・平田燿子 『本間久雄—大正時代のヨーロッパ文化移入—』 早稲田大学出版部, 2012
- ・本間久雄 『文学と美術』 東京堂, 1942
- ・森田恒友 『田園小景』 龍星閣, 1954

【註】

- ¹⁾ Sempé, Jean-Jacques (1932-) フランスの漫画家、イラストレーター。ルネ・ゴシニとの共著『プチ・ニコラ』シリーズで知られる。



(主催) 早稲田大学図書館

広報用ポスター